



『カトリック教会と奴隷貿易 —現代資本主義の興隆に関連して—』

著者 西山俊彦 (サンパウロ、2005年)

本書の書名が衝撃的です。これまでも西山俊彦神父の著書『カトリック教会の戦争責任』や『カトリック教会と沖縄戦』等は読ませていただきましたが、「西山神父さん、今度もまたすごいのを執筆されたなー」との思いで本書を手に取りました。

まず、表紙の写真に目が留まります。それは、1992年、ゴレ島(ダカールの小島)にあるかつての奴隷船の出港地である『奴隷の家』を訪ねて《謝罪》に励む教皇ヨハネ・パウロ2世の写真です。教皇が何を思いながら海をご覧になっておられるのか。そのようなことを想像しながら本書を開いていきますと、はじめの数ページは、様々な写真やイラスト、図が掲載されています。なかでも一枚目が奴隷船のイラストと奴隷積載図。まさに、人間ではなく、家畜を運ぶような船倉と配置図を目にしなが、序文、本論へと導かれます。それはある意味で視覚的に、教皇が読者をキリスト者の一人として導くように、評者自身を奴隷貿易のただ中(あなたもそこにいたのか)へと、導かれる思いです。

本書は、第一部『カトリック教会は奴隷貿易に深くかかわってきたのではないか』、第二部『「アメリカ大陸」の実態とカトリック教会の関与』(一)、第三部『「アメリカ大陸」の実態とカトリック教会の関与』(二)、第四部『プランテーション生産と産業革命、そして、それに続く先進諸国の興隆(と途上諸国の衰退)』、第五部『奴隷貿易正当化の理論と実態「人皆神の子」を語って止まなかったキリスト教がなぜ』、第六部『「見捨てられた大陸」の現状』、第七部『カトリック教会による SSA 諸国の現状認識と奴隷貿易についての対応』と論述されています。内容を詳細に記す紙幅はありませんが、総じて、論題に関して丁寧に論述されています。それは歴史的検証であり、社会学的検証であり、そしてまた、キリスト教会の罪責としての検証です。そしてまた、挿入された数々の図や表、写真などが、読者を視覚的に数値的に、この奴隷貿易の罪の深さに身を置かされ、奴隷とされた者たちの魂の叫びが聞こえてくるかのようです。

評者はプロテスタント教会の牧師です。奴隷貿易に関しては、カトリック教会も大きな過ちを犯したでしょう。けれども、プロテスタント教会もまた同罪です。著者はカトリック教会の神父として、神に仕える一キリスト者として自己の信仰を問い返す思いで執筆されています。それはま

た、前掲の『カトリック教会の戦争責任』やその他の著書にも通じることでありますが、得てして、自己の責任や自己批判を問おうとしない社会一般的なありように対して大きな一石を投じております。過去をうやむやにして何が「将来への責任」か。「平和の福音」を告げ知らせるキリスト者は、本当にこのままで良いのか。と問いかけつつ、著者自身が「過去を振り返ること」「過去の弱さを認めること」は「私たちの信仰を強める勇気ある誠実な行為です。」(教皇ヨハネ・パウロ二世)の言葉を実践される証しの書、とも言えるでしょう。

本書は初版から第二版にかけて、いわゆる差別語(不快語)や問題を含む歴史的な語が修正されています。当然といえば当然の行為ですが、一点でも自分の発する言葉、文字が隣人に対して痛みを与えるようなものであれば、その指摘に真摯に対応し直していく。これもまた痛みを伴う行動ですが、本書のいわんとする己の《罪》に対峙することです。「他人を非難する前に自己の罪過を告白しなければなりません」を本書に記した著者自身の真摯な対応に、共に教会の欺瞞性を取り除かんとする姿を思われます。明日の教会を生きるための必読書のひとつです。

(日本基督教団 大正伝道所(大阪教区)牧師 上地武)

